

地域で、自分らしく暮らし続けるための、地域密着型サービス

高齢者のほとんどは、何らかの持病や体の不自由さを抱えています。また、認知症の方の人数も年々増加の一途をたどるばかり。個人差はあっても、人はいずれ、日常生活において、誰かの援助を必要とすることもあります。しかし、たとえ介護が必要な状態になっても、人間としての尊厳を保ち、住み慣れた自宅や地域で生活を続けたいものです。こうした願いを叶えるために、平成18年4月に介護保険法が改正され「地域密着型サービス」が誕生しました。今回は、地域密着型サービスの内容とサービスのひとつである「認知症対応型通所介護」の一例を紹介します。

地域密着型サービスとは？

地域に着目した介護サービスの新しい体系

住み慣れた場所で、自分らしく日々の生活を楽しまいと、誰もが望んでいます。重病をわずらった、認知症になった、というだけでも、気持ちは落ち込み、経済的にも社会的にも、苦しくなるのに、その上、慣れない環境へ移ることを余儀なくされては、相当なストレスがかかってきます。

そうしたことから、高齢になり、病気やけが、体が不自由になった場合でも、できるだけ家族に負担をかけることなく、地域でこれまで通りに、自分らしく生きられるように、平成18年4月より「地域密着型サービス」が提供されるようになりました。

地域密着型サービスには、夜間に介護福祉士などが訪問し、入浴、食事などの介護を行う訪問介護や、認知症のため介護を必要とする人たちが共同生活できるグループホーム、認知症に特化したデイサービス(通所施設)など、利用者のさまざまな状況を想定したサービスがあります。

地域密着型サービスの生まれた背景は？

利用者の増加に質は？サービスをより身近にキメ細やかに提供

「地域密着型サービス」が生まれる背景には、平成12年4月の介護保険法の実施にともない色々な課題があきらかになりました。

介護保険法の施行により、高齢者のための介護施設やデイサービスやグループホームなど、新しいサービスが次々と生まれました。また、介護が必要な状態になっても人間としての尊厳を保ち、住み慣れた自宅や地域で生活を続けることができるように、介護サービスを自分で選択・契約して利用するという考え方が定着してきました。

しかしながら、介護サービスを利用する人の数は増えたものの、サービスの質はそれに追いついていませんでした。一人ひとりの身体の状態や暮らし方・生き方、家族関係など生活環境への配慮のない、画一化されたサービスであったり、一部では事業者本位のサービスになっていたり、また、国のねらいであった「施設から地域へ」の移行も予想していたより進みませんでした。

そこで、利用者が身近なところでサービスが受けられるよう地域に密着した新たな介護サービスの体系として「地域密着型サービス」が整備され、日常生活圏域ごとに必要な数などをバランスよく配置し、よりきめ細やかな対応ができるように、事業者の指定権限を従来の都道府県から、身近な市町村に移譲。市町村から地域密着型サービスが提供されるようになったのです。

サービスにはどんな種類があるの？

認知症特化型から、泊り・訪問・デイを受けられるマルチ型サービスまで

地域密着型サービスには、次の6つがあります。



- 夜間対応型訪問介護
- 認知症対応型通所介護(デイサービス)
- 小規模多機能型居宅介護
- 認知症対応型共同生活介護(グループホーム)
- 地域密着型特定施設入居者生活介護
- 地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護

大阪市では平成21年11月現在、地域密着型サービスとして、指定した事業所は、以下の通りです。

	事業所数	定員
夜間対応型訪問介護	3	80
認知症対応型通所介護	50	544
小規模多機能型居宅介護	18	439
認知症対応型共同生活介護	126	2,054
地域密着型特定施設入居者生活介護	0	0
地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護	2	52

サービスの中では、グループホームの事業者が最も多くなっています。平成20年度末から、指定事業者数が増えているのは、グループホーム、認知症対応型の通所介護、小規模多機能居宅介護の3サービスで、それぞれ6%、13%、6%増加しています。

■地域密着型サービスの各サービス内容

▶夜間対応型訪問介護

夜間に定期的な巡回、または連絡によって、介護福祉士などから、自宅を訪問し、入浴や排せつ、食事の介護のほか、日常生活上のお世話を受けられるサービスです。

▶認知症対応型通所介護(デイサービス)

通いで入浴、排せつ、食事などの介護や日常生活上のお世話や機能訓練を受けられるサービスです。認知症のため「要介護」と認定された人が対象です。

▶小規模多機能型居宅介護

居宅やサービスの拠点で、入浴、排せつ、食事などの介護や日常生活上のお世話や機能訓練を受けられるサービスです。「通い」を中心に、利用者の状態や希望に応じて「訪問」や「泊まり」を組み合わせることができます。認知症のため「要介護」と認定された人対象です。

▶認知症対応型共同生活介護(グループホーム)

認知症のために介護が必要な人たちが10人前後で共同生活を営むグループホームで、入浴、排せつ、食事などの介護や日常生活上のお世話や機能訓練を受けられるサービスです。認知症のため「要介護」と認定された人が対象です。

▶地域密着型特定施設入居者生活介護

地域密着型の特定施設(有料老人ホームやケアハウスなどのうち、特に介護専用型特定施設で、入居定員が29人以下の施設)に入居している要介護者を対象に、入居施設において、入浴、排せつ、食事などの介護や日常生活上の世話や機能訓練を受けられるサービスです。

▶地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護

特別養護老人ホームのうち、入居定員が29人以下の「地域密着型老人福祉施設」に入居している要介護者を対象に、入居施設において、入浴、排せつ、食事などの介護や日常生活上の世話や機能訓練を受けられるサービスです。

担当局へインタビュー

誰もが気軽に相談できる地域の総合窓口が必要

地域密着型サービス事業者などの指定・指導に関することについて大阪市健康福祉局高齢者施策部介護保険担当係長 中村光児さんにお聞きしました。

—地域密着型サービスは、一言でいえばどんな事業ですか？

平成18年に改正された介護保険法第1条に要介護高齢者の「尊厳の保持」項目が新設されたことをなどがあり、地域密着型サービスがつくられました。したがって、高齢者の尊厳を支える事業といえるかもしれません。

—「グループホーム」は、「ホーム」ですが、施設扱いではないですね。

よく勘違いされますが、施設ではありません。共同生活の住居なので、むしろ、長屋と思ってもらったほうがわかりやすいと思います。現状では、長屋ほど、地域に開かれているとは言い難いですが、目指すところは、地域の人がふらっと立ち寄り、声をかけられる長屋です。

—「認知症対応型のデイサービス」とありますが、一般のデイサービスとどこが違いますか？

一般的なデイサービスは、日常生活をよりスムーズにおくれるようにするための、機能訓練のためのメニューを重視しています。したがって、サービスを行う施設には、機能訓練ができる設備が求められます。しかし、認知症対応型

通所介護の場合は、日常生活の延長の環境をつくり、その場所で過ごすことが機能訓練になっています。平成18年の介護保険法改正以降、大阪市が指定した事業所のほとんどは、こうした日常生活延長型のサービスを提供しています。

—日常生活の延長とは興味深いですね。

「施設」というより、まるで「自宅」のような雰囲気をかもしだしている事業所も多くあります。生活の場面は、多様な動きが必要になるため、持ちうる能力を最大限、活用することにもなりますし、リラックスできるため、ご本人の満足度も大きいようです。市からの指導も、設置基準の範囲内で、利用者が喜ばれるような、これまでの日常の暮らしを連想できる施設になるようなアドバイスもします。

—「小規模多機能型居宅介護」とは、とても便利そうな名前のサービスですね。

通所が中心ですが、泊まりもできる。いわば「訪問介護」「ショートステイ」「デイサービス」を組み合わせたマルチなサービスです。しかし宿泊を含む多機能な事業所だけに建物の設置基準が厳しく、また、マルチにサービスを提供できる事業所自体が少ないのが現状です。—介護サービスを提供するにあたり、今後、地域は、どのようになればいいとお考えですか？

過去には、介護の必要な高齢者を「寝かせ

きり」にしていた時代がありました。その頃から比べれば、ずいぶん変わってきたと思います。しかし、現状のサービスでは、在宅介護はまだまだ家族の負担も大きいですし、また、介護保険が普及してきたとはいえ、地域には必要な介護保険サービスをうまく利用できないでいる高齢者の方も多く存在しています。

在宅介護の負担を軽減してくれる小規模多機能型サービスが充実すれば、要介護者も介護する人にとっても「最後まで在宅で」が夢でなくなります。また、病院に入院している方や、施設に入所している方も、症状がよくなったとき、身近に小規模多機能型サービスがあれば、自宅に帰りやすくなります。

—介護保険をうまく利用できない高齢者の問題はこうしたらいいでしょうか。

既存の地域包括支援センターやランチ(窓口)に小規模多機能型サービスを併設し、地域の問題を地域で解決していく力のある「総合的な相談窓口」が各地域に設置できれば理想的です。堅い感じでなく、日頃から気軽に立ち寄って、介護の相談ができるようなオープンな雰囲気をつくっておけば、介護サービスをうまく利用できない方は少なくなります。行政は、適切なサービス提供ができるよう、事業者の不正をとりしまりつつ、そのしくみ全体をバックアップしていきます。

—ご協力、ありがとうございました。

認知症になっても、安心して、自分らしく生きられる場を

認知症高齢者の増加を背景に、地域密着型サービスの中で注目を集めているのが「認知症対応型通所介護(デイサービス)」。そこで今回は、東成区の「サンローズオオサカデイサービスセンターあかね」を訪ね、その様子をレポートします。「あかね」というネーミングには、太陽が沈むその瞬間まで輝き続けるその色に、高齢者の人生を重ね、一人ひとりが最期の瞬間まで輝いてほしいという想いが込められています。その想いは、サービスの随所に表れていました。

我が家のように リラックスできる空間

訪れて、まず驚くのが建物の入り口です。玄関には、昔ながらの格子の引き戸が使われていて、まるで「我が家」に帰ってきたかのような錯覚におちいります。

ガラガラガラ……。中に入ってまたビックリ。「本当に施設？」と戸惑うほど、普通の住まいだったからです。大きな部屋を、リビング、キッチン、和室という、3LDKの間取りに模した形でゆるやかに区切り、それぞれの空間に特徴を持たせてあります。

手前左の部屋は、テレビやソファの置かれた洋風の団らんスペース。向かって右側には、対面型のキッチンがあります。左手奥の畳の間は、こたつを真ん中に、タンスや棚など低い家具で囲んだ和室のスペース。その棚の上には、ガラスケースに入った日本人形が飾られるなど、利用者にとってなじみのある、昭和の風



情が演出されています。向かって右側には、奥から、トイレ、風呂場、そして手前のキッチンへとつながっています。

持っている意欲や力を 発揮できる環境づくり

「おじゃまします」。手前のダイニングスペースに入ろうとすると、そこに座っていた男性がにっこり笑って席を譲ってくれました。次に、そばにいた女性が、布巾を持ってきてテーブルをていねいに拭き、お茶を入れてくれました。施設の利用者「お客さん」として迎えられ、何か不思議な感じです。

一方、お昼前とあって、キッチンでは、利用者とスタッフが一緒に昼食の準備をしています。「これ、何個もっていくの?」「いい匂いやね」。今日のメニュー「ぶり大根」について話している利用者とスタッフの明るい声が聴こえます。孫ほどの年齢差のある若いスタッフを相手に、利用者の表情もやわらか。ゆっくりとしたペースで味噌汁をよそったり、テーブルへ食事を運んだりしています。

一般の介護なら、「ご飯食べましょう」「お風呂行きましょう」など介護に直接関係した会話だけになってしまうかもしれません。しかし、「あかね」では、日常生活がベースにあるので、いろんな話題があります。ふだんと同じような生

活、スタッフや他の利用者とのふれあいや人間関係の中で、その人の持っている意欲や力を引き出しているのです。

日常生活をベースにした環境の中で、利用者がより自然に過ごせるようにするためには、話しかけ方にも工夫がありました。

「『ぶり大根をつくりましょう』といっても、何をどう始めていいかわかりません。私たちだってそうですよね。でも『ぶりを、こんな風に二つに切りましょうか』と実際に動作を加えながら具体的にお願いすると、上手に切っていただけます。慣れてこられると、『ここどうするの? 言ってよ』と尋ねてこられることもあります」と副施設長の高落さん。

続けて「会話がうまく成り立たず、急に立ち上がる行動をされる方で、調理をしてもらうことなんて思いもしなかった方がおられます。その方に、まな板の上にタマネギを載せて包丁をお見せしたら、包丁を持たれたんです。そこで『こんなふうで切ってみてください』と実際に目の前でお見せしたら、上手に切られてびっくりしたことがあります。その後、洗い物もチャレンジしていただきました。私たちは、ついその包丁でケガでもされたら…と心配し過ぎてしまいがちです。それに加えて『この人にはこんなことはできるはずはない』と思い込んでいます。それが、その方をできない状況にしているんだと皆で反省しました」

認知症の人の立場に立って、やってみせたり、わかりやすく説明したりするだけで、その人の不安を減らして、力を発揮する機会をつくることができます。認知症の人と接するときの参考になりそうです。

一人ひとりの ここに寄り添って

「あかね」では、認知症の専門的な知識と、スタッフそれぞれの感性を総動員して、ケアにあ



▲我が家のようなアプローチ。看板はスタッフの手作り。



▲スタッフと利用者が一緒につくった畑。



▲昭和を思わせる和室で静かに過ごす女性。

たっています。

その基本的な考えは、一人ひとりのペースに合わせ、心に寄り添うことです。例えば、この日の昼食も、ある人は洋室で、ある人は対面キッチンのカウンターで食べ、そして、赤ちゃん（人形）のケアに忙しい女性のところへは、スタッフが小さなテーブルをそばまで持っていき、女性は、そこで食事をしていました。

「今はどんな風にお過ごしになりたいのか…。うまく言葉にできなくても、隣に座っておられるこの方は何を感じておられるのか、その方の心を受けとめようとするのが大切だと感じています」と高落さん。

認知症の人に対して、一般的に誤解が多いのは、「記憶障害により、忘れてしまうのだから認知症の人は楽なのでは」ということです。しかし、実際は、その逆。見たこと、聞いたこと、自分がしたこと、認知症の人は、たくさんをすぐに忘れてしまうため、日常生活が定まらず、毎日、不安や混乱を抱えながら過ごしているのです。そんなときに「○○といったでしょ！何回言えばわかるの！」と忘れたことを注意すれば、ますます不安になってしまいます。そうならないために、何度同じことを聞かれても、不安を受け止めながら、やさしく丁寧に説明することが大切なようです。

私たちが忘れてしまっただけで思い出せなかったり、ものがなくなったりすると不安になります。その上、注意されるともっと不安になる。そんなときに「大丈夫」という感じの笑顔で、丁寧に説明されたら、気分はだいぶ楽になります。「自分がその立場だったら」と感じるのが認知症の人を理解する一歩になるのです。

「帰ってからの表情が違う」と家族の声

「あかね」では、利用者の家族とスタッフ、そ

れぞれが1日の中で、利用者について気づいた点を連絡ノートに記録し、やりとりをしています。家族の記録の中には「収集癖がなくなった」「おかあさん(妻)の話を素直に聴くようになった」「お箸をつかえるようになってきた」と、利用前と比べ、良い方に変化したことが多く書かれていました。以前通っていた一般的なデイサービスでは「帰りたい」といってきかなかった方が、ここではお母さんのような立場で、洗濯物をたたんだり、料理を作ったりできるようになる例もあるそうです。

「「帰ってからの表情が違います。晴れ晴れとした感じで」と教えてくださるご家族のほっとした表情を見ると、ご本人だけでなく、ご家族の喜びも伝わって、二倍に嬉しいですね」とスタッフ。

認知症への理解を地域にも広めていきたい

認知症になると、もの忘れなどから、だんだん地域での活動や友人との輪の中に入るのが難しくなることがあります。

そこで「あかね」では、近くの喫茶店のコーヒーサービスや憩いの家など地域で行われるイベントなどにも、声がかかればできるだけ参加し、活動範囲を地域へと少しずつ広げています。

今後のビジョンをうかがいました。

「認知症は特別な病気ではなく、誰もがそうなる可能性があります。たとえ認知症になったとしても、人生最期の日まで、毎日をおだやかに、自分らしく生きていけたらどんなに素晴らしいでしょうか。認知症になった人の生きづらさ、暮らしにくさについて周囲が理解し、また認知症の人にこちらも助けられる、そんな温かい社会を、ご本人もご家族も地域の方々も専門職も皆で一緒につくっていったら…。そのために、できることから少しずつ始めていきたいと思います」

現場からの報告

その人にあった
手助けさえあれば、
不安はずいぶん解消される



主任相談員

◎金中 美明さん

私は、以前、サンローズオオサカ内にある一般のデイサービスに勤めていました。「あかね」へ来て、一般のデイサービスでは、見えなかった利用者さんのさまざまな側面がわかり、私がこれまで、サービスというものをいかに単純にとらえていたかに、気づかされました。

一般のデイサービスでは、機能訓練の一環として、何かしていただくとき、スタッフが下準備をすませたものを渡し、その後の段階から利用者さんにやってもらっていました。私は、その方の「できる・できない」をそこだけで判断していたのです。

しかし「あかね」では、料理にしても、下準備の終わったものが出てくることはありません。スタッフと一緒に最初からつくります。すると、ご飯をつくることひとつにしても、米が洗えない人もいれば、米は洗えるけれど、お水は計れない人がいる。同じ認知症でも、苦手なところは人によって違うのです。そして、お水が計れない方には「3(合)の線のところまで入れていただけますか」というだけで、その方は間違わずに済みます。その方にあった的確な手助けさえできれば、ご本人ができることはたくさんあるのです。

地域には、認知症介護のサービスを利用せず、問題を家族だけで抱え込んでしまわれることもまだまだあると思います。地域の方々と連携しながら、できるだけ多くの人にサービスを届け、サンローズオオサカの理念のように、自分らしく暮らしていただけるよう努力していきたいと思っています。



▲「はい、どうぞ」。慣れた手つきでお茶を出していただいた。



▲「おいしいね」と自然に笑顔。